

明治大学 黒耀石研究センター ニューズレター

No. 23

September 2025

Center for Obsidian and Lithic Studies Newsletter

新センター長挨拶

本年4月、石川日出志前センター長の定年退職に伴い、黒耀石研究センター長を拝命しました、文学部専任教授の藤山龍造です。着任から半年が経過し、ご挨拶が遅れましたことを深くお詫び申し上げますとともに、6年間にわたってセンター運営に尽力された石川先生に深く敬意を表したく存じます。これまで歴代のセンター長が切り拓いてこられた道筋を大切にしながら、明治大学研究・知財戦略機構の附属研究施設として、新たな歩みを着実に進めてまいります。

あらためて申し上げるまでもなく、明治大学黒耀石研究センター（COLS）は、長野県長門町（現長和町）における黒耀石原産地遺跡の調査を通じて、21世紀の幕開けとともに設立されました。本年をもって、設立から四半世紀という節目を迎えることとなります。設立以来、黒耀石考古学をその中核に据えてきましたが、こうした蓄積を土台として、黒耀石考古学・先史考古学・植物考古学の三領域を柱とし、人間と自然が織りなす関係を多角的に捉える研究拠点として発展を遂げてきました。私自身も、更新世から完新世への環境変化と、それに呼応して人間社会が再編されてゆく過程に長らく関心を寄せ、研究を重ねてまいりました。この点において、センターの研究理念と私自身の探究の方向性は大いに重なりあっており、今回のセンター長就任は、これまでの歩みの延長線上にある自然な流れとして受け止めております。

2024年4月、黒耀石研究センターは、大きな転機を迎えることになりました。本部機能を長和町から駿河台キャンパスに隣接する猿楽町校舎へと移転することで、大学教育との接続強化を図るとともに、これまで以上に機動性を高めてゆくことを目指しています。同年には堤隆特任教授が着任し、また2025年には池谷信之特任教授（副センター長）が再任され、猿楽町本部を拠点として教育・研究の両面を強化しているところです。もちろん、これによって長和町との長年の関係が揺るぐことはありません。これまで通り長和町との連携関係を大切にしながら、長和分室を教育・研究に活用し、地元コミュニティとの協働を深めつつ、地域連携のハブとしての役割をいっそう果たしてまいりたいと考えております。まさしく、これまでの四半世紀を礎として、次なる四半世紀の構想を描く時を迎えています。

私事で恐縮ですが、これからの四半世紀は、私が退職を迎えるまでの期間とほぼ重なります。着任早々、いささか気が早いようにも思いますが、これまでの黒耀石研究センターの蓄積を踏まえ、次世代へいかに発展的に継承していくかを真剣に考える必要があると感じています。そのためには、センターがなぜ存在するのか、

目次 Contents

- *新センター長挨拶…………… 1
- *新刊紹介 (2)…………… 2
- *研究の現場から…………… 3
- *考古学フォーラム…………… 4
- *黒耀石研究センタートピックス…………… 5

何を目指すのかという根本的な問いに、あらためて一人ひとりが向き合うことが求められています。明治大学にとって、在校生・卒業生にとって、それぞれの研究者にとって、考古学の世界にとって、そして何よりも社会にとって、黒耀石研究センターが存在する意味とは何か。次の四半世紀を見据えるにあたり、こうした問いを様々な立場から見つめ



新センター長 藤山龍造専任教授

直すことで、私たちの進むべき道筋がより明確になると信じています。この営みこそが、センターの存在意義をより確かなものへと育てていく礎になるはずで

す。本部機能の猿楽町校舎への移転ともない、黒耀石研究センターは、大学教育との接続をいかに深化させるかという課題に真正面から取り組んでいます。センターが現在進行形で蓄積している知的資源を、学部・大学院教育と連動させることで、所属研究者が自身の研究成果を教育に還元するだけでなく、学生との協働を通じて学びを共に深める機会が広がりつつあります。こうした実地経験を通じて、学生が学問の実践性と社会的意義を体感し、それぞれの関心や志向に応じた視座を育むことが期待されます。現場で培われた経験と能力は、専門性の有無を問わず、社会と柔軟に関わる力として活かされるものであり、ひいては大学の魅力を高める重要な要素ともなります。教育・研究・地域との協働を有機的に結びつけることで、センターの機能を再定義し、次世代の育成と知の継承に資する場としての役割を果たしてまいります。

黒曜石研究センターの活動は、単なる研究拠点の運営にとどまらず、大学の魅力をいかに高め、社会にいかなる価値を還元していくかという根本的な問いに接続されています。その歩みは、センター員・客員研究員に加え、地域の皆様、大学関係者、そして広く考古学・人類学・環境史に関心を寄せる方々との協働によ

てこそ、豊かなものとなります。私たちは、知の営みを閉じられたものとしてではなく、開かれた対話の場として育てていきたいと願っています。皆様の温かなご支援を、心よりお願い申し上げます。

2025年9月吉日
藤山龍造

新刊紹介 (2)

Yaroslav Kuzmin 著 2024

*"Across the Seas in Prehistoric Northeast Asia:
Obsidian as a Commodity for the Study of Human Migrations"*

はじめに 前号 (No.22) では、本書の全体的な構成を概観した。本号では第6章「Obsidian sourcing in the Japanese Islands」(日本列島における黒曜石の原産地推定) について紹介してみたい。著者のYaroslav Kuzmin (下写真) の専門分野は地質学ということもあり、日本列島についても、まずその地学的な環境—つまりプレートの沈み込み、火山フロントと黒曜石の生成の関係およびその年代—を俯瞰することからスタートしている。さらに東北アジアの中では日本が最も黒曜石研究が進んでいること、原産地推定が実施された黒曜石サンプルは、数十万点に達するであろうことも紹介されている。そして、1. 北海道、2. 本州、3. 九州・琉球列島の節を設けて各地の黒曜石の産状とその供給が述べられている。

北海道 まず北海道の黒曜石原産地の多くは、太平洋プレートが北米プレートの地下に潜り込むことによって引き起こされた火山活動に起因していることが確認されている。さらに白滝・置戸・十勝・名寄など、北海道を代表する原産地の多くが、「紋別—上士幌地溝帯」内に存在することを指摘している。この地溝帯は1,600万年前以降に日高山脈を出現させた隆起運動に起因し、火山活動や造盆地運動を伴うテクトニクス(地球表面近くの岩石圏あるいはその動き)となっているが、これまで黒曜石の生成との関係が注目されることはほとんどなかった。

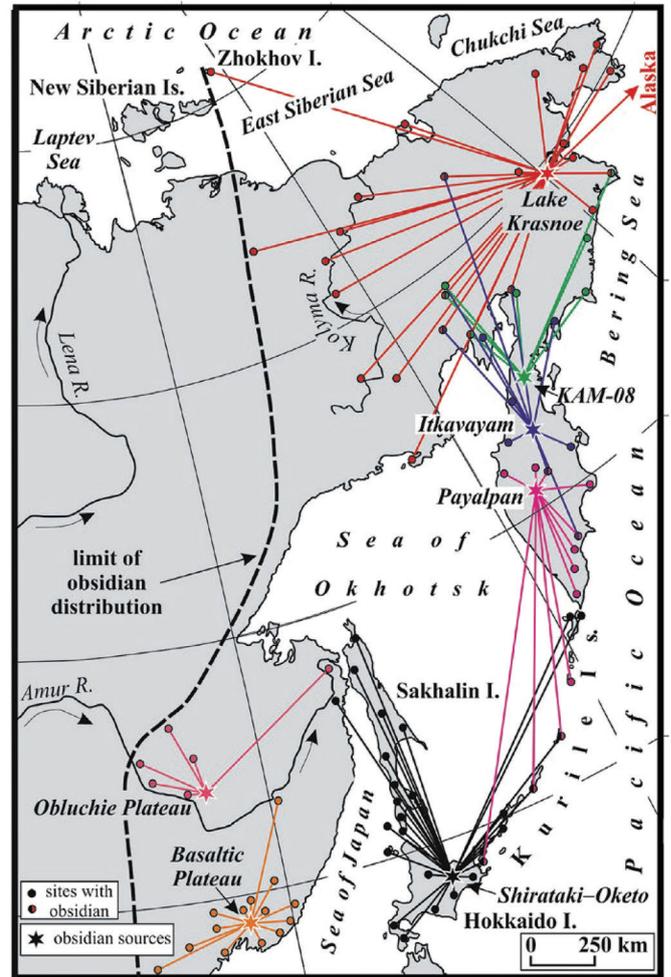
白滝産黒曜石が2つの化学的グループ(白滝A・白滝B)に分けられることは、現在では考古学・地質学の両分野における共通認識となっているが、これはKuzminらの分析によるものである。この白滝産黒曜石の広域流通については、これまで彼が精力的に



Yaroslav Kuzmin p.65, Fig.6.6
撮影：2015年 池谷信之
沼津市文化財センターにて

追究してきたテーマでもある(右図)。白滝産黒曜石はクリル(千島)諸島、サハリン(樺太)島はその北端まで、さらにアムール川下流にも到達しているという。北海道白滝産を含めた東北ユーラシアの黒曜石流通を示したこの図は、Kuzminの長年の研究の結晶ともいべきものである。

本州 ここでは本州の黒曜石原産地の多くが、流紋岩類に関連しており、小規模な溶岩流・溶岩ドーム・ダイク(火山岩尖)・火砕流中に存在することがまず述べられている。さらに霧ヶ峰など中部高地の原産地に加



北東アジア北部における黒曜石流通のネットワーク p.82, Fig.8.2

え、高高山・箱根・天城・神津島・隠岐の原産地の産状と火山活動、その年代が述べられている。

またこれらの原産地のほとんどが後期旧石器時代早期(EUP)には当時の人々によって開発されていることに加え、その調達に単一の原産地に依存していなかったことに注目している。こうした状況は、日本国内ではほぼ共通認識となっているものの、本格的な開発の時期が異なる北東アジアの原産地全体を視野に入れるKuzminならではの視点である。

彼はまた長野県和田原産地の直近に立地する広原遺跡でのCOLSの調査成果—気候変動と植生の変化と黒曜石採取の関係—について詳しく紹介するほか、池谷による関東地方における縄文時代の黒曜石供給の通時的変化、長野県長和町星糞峠原産地の縄文時代の黒曜石採掘活動などに言及している。

九州・琉球諸島 冒頭にこの地域の黒曜石の調達と利用について外国人研究者がアクセスできる論文は非常に限られている、という我々にとっては耳の痛い指摘がある。そうはいものの、各原

産地の地質的条件、産状、その年代について、かなり詳細に記述されている。

その流通については、特に腰岳産黒曜石に注目している。ここから採取された黒曜石が、後期旧石器時代（約31,000年前）には対馬海峡を越えて韓半島に到達しているというLee, G. K.らの原産地推定の成果に触れ、さらに縄文時代には韓半島に加え、沖縄本島ほか琉球列島のほぼ全域に海を越えて運ばれるという小畑弘己と芝康次郎の研究成果を紹介している。

おわりに Kuzminの研究手法で印象的なのは、日本列島の地質、特に黒曜石の生成にかかわる文献を丹念に渉猟し、その地質的条件を理解したうえで産状が述べられていることである。いっぽう遺物としての黒曜石の分布については、「得られる情報が限られている」と残念がる記述が複数回登場する。現在、日本列島内の黒曜石原産地推定の一次的情報については、そのほとんどが日本語のみで発信されており、海外からこの情報にアクセスする手段を整備する必要性を強く感じた。【続】 (池谷信之)

研究の現場から

APA第12回日本大会 参加報告

アジア旧石器協会（Asian Paleolithic Association：通称APA）は日本、中国、韓国、ロシアの旧石器研究者によって構成される学術団体で、2008年6月にロシアのアルタイで開催された「オクラドニコフ生誕100周年記念国際シンポジウム」会場で設立総会が行われ発足した。2014年の第7回までは年1回、その後、2年に1回のペースで開催され、本年6月20日から24日までの5日間、東北大学を会場に第12回大会が開催された。日本で開催される大会は第4回、第8回に続き3回目となる。筆者は日本で最初に開催された第4回大会（2011年）から日本大会の実行委員として関わってきているが、今回の大会の参加を通して、東アジアにおける研究状況が大きく変わってきていることを通感した。

■プログラム

6月20日（金）：TOKYO ELECTRON House of Creativity,
Katahira Campus

Registration

Special lecture: Paleolithic industries in China and implications
for hominin evolution trajectories in East Asia
Prof. Xing Gao (IVPP, Chinese Academy of Sciences)

6月21日（土）：Multimedia Education and Research Complex,
Kawauchi Campus

Session I：Recent progress in studies on lithic technology
and Paleoanthropology of genus Homo in Asia

Symposium：Early Upper Paleolithic in Asia: Commonality and
diversity after the IUP

6月22日（日）：Multimedia Education and Research Complex,
Kawauchi Campus

Session II：Early Upper Palaeolithic technology, fauna, and
site formation in Asia

Session III：A close look at Upper Palaeolithic variabilities in
Asia

Poster Session

6月23日（月）

Post-conference excursion

6月24日（火）

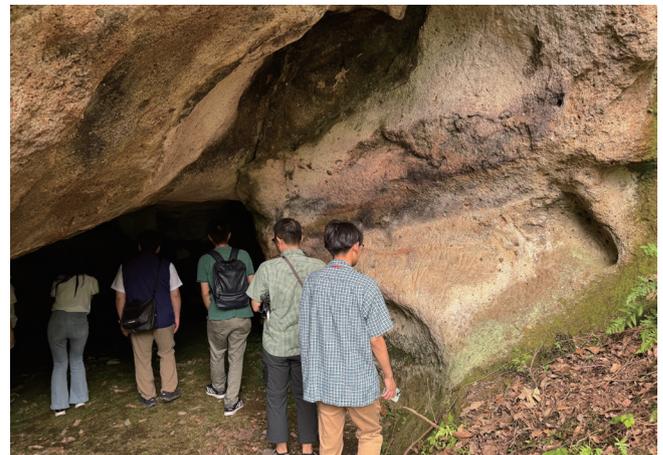
Departure

11ヶ国から130人の参加者を迎えた本大会、初日に高星（中国科学院古脊椎動物古人類学研究所）の特別講演に始まり、シンポジウム発表9本を含む口頭発表36本、ポスター発表40本の計76本の研究発表があった。黒曜石研究センターからは池谷・堤（特任教授）、中村・島田（客員研究員）、鈴木（特別嘱託）の5名が参加、旧石器学会会長でもある堤が開会の挨拶を、堤と鈴木がポスター発表を行った。

APAが発足してから十数年の間に遺跡発掘や出土資料の分析方法は最新技術を取り入れ科学的で多様になり、様々な手法による分析を通して遺跡や遺物を多角的に考察するようになってきている。中国やロシアにおける発掘調査に関わる発表を聞く限り、遺跡でのmicromorphology分析や¹⁴CやOSLによる年代測定、石器の接合や3Dモデルの解析も含めた技術形態学的分析、使用痕分析や実験考古学も含めた製作・使用復元、faunaの分析やその他の古環境復元データとの対比など、最新の分析方法が取り入れら



堤（特任教授・日本旧石器学会会長）の開会あいさつの様子



日向洞窟（山形県）見学の様子（エクスカージョン）

れている。すなわち、複数の関連分野の専門家を交えた大がかりな研究プロジェクトの上に遺跡調査を行うのが当たり前になっているように思えた。

日本列島ではただでさえfaunaの出土がほとんど望めないうえ、発掘調査の大部分が依然開発に伴う事前調査で、数少ない学術調査も大学の研究室単位で行うような極めて小規模な発掘が多いように思う。私も含め、大いに刺激を受け、日本の旧石器研究の今後について憂慮した研究者が多かったのではないだろうか。

会議後のエクスカージョンも75名が参加、用意した2台の観光バスが満席状態であった。朝、仙台を出発して山形のうきたむ風土記の丘考古資料館へ、そこでは展示品以外にも山形県内の遺跡から出土した旧石器時代の石器が集められており、東北地方の良

考古学フォーラム

黒曜石研究センターではこれまで研究活動や成果発表の場としてやや専門性の高いシンポジウムの開催のほか、社会的還元を視野に入れた普及活動の一環として、関心の高いテーマの講演会や映画上映会、ワークショップなども行ってきた。今年度からそのような研究成果の周知に関わるイベントを黒曜石研究センター「考古学フォーラム」としてシリーズ化し、年間を通じて開催していくこととした。

本年度4月から8月までの期間にすでに以下の5回のフォーラムを開催している。

＊第1回 講演会『後期旧石器時代の新たな構造論』

2025年4月20日（日）

会場：明治大学駿河台キャンパス
グローバルフロント 4021教室

内容：【問題提起】

諏訪 順「神奈川の旧石器遺跡の石材と領域を考える」

【主要講演】

伊藤 健「後期旧石器時代の新たな遺跡構造論」

＊第2回 公開講座&映画上映会

2025年5月10日（土）

会場：伊那市創造館 3階 講堂

内容：【公開講座1】

大竹憲昭「信州に初めて訪れた人びとは？—日本列島最古段階の旧石器 竹佐中原遺跡」

【公開講座2】

堤 隆「最古の信州ブランド—黒曜石資源の開発をめぐる謎」

【映画上映】

『掘る女 縄文人の落とし物』 2020年公開
松本貴子監督作品

＊第3回 講演会『後期旧石器時代の成立と展開』

2025年5月18日（日）

会場：明治大学駿河台キャンパス
グローバルフロント 4021教室

内容：【基調報告1】

大竹憲昭「竹佐中原石器文化から後期旧石器時代の成立を考える—非石刃石器群と石刃石器群—」

質の珪質頁岩製の石刃や細石刃などの石器を手にとって観察することができた。昼食後、高島町の国史跡日向洞窟を見学、最後に仙台の地底の森ミュージアム（仙台市富沢遺跡保存館）を訪れた。このミュージアムには、2万年前の埋没林とそこに残された旧石器時代狩猟採集民の痕跡がどのように発掘調査・研究されてきたかがわかりやすく展示されている。何度見ても圧巻のこのミュージアムに海外の研究者も興味津々の様子であった。

仙台駅で旅程を終え、解散した後も名残惜しそうにその場にとどまって挨拶を交わす人々の姿はなかなか消えず、会が盛会だったことを物語っていた。

今回の大会中に開催されたAPAの4か国代表者会議では、新たにモンゴルが加盟し、次回大会は2027年にモンゴルで開催されることなどが取り決められた。楽しみである。（鈴木美保）

【基調報告2】

塩原 健「礫塊石器から考える後期旧石器前半期の地域的生業—南九州西多羅ヶ追遺跡の事例から—」

【主要講演】

鈴木忠司「岩宿時代の暮らしと社会の究明のために—礫群を題材として—」

＊第4回 『列島最古の石刃遺跡香坂山—達人の技でよみがえる香坂山の石刃作り』

2025年6月29日（日）

会場：佐久市岩村田 浅間会館 大会議室

内容：八風山のガラス質黒色安山岩を使った列島最古といわれる香坂山の石刃作りの実演（金彦中）と香坂山遺跡出土石器の解説（堤 隆・藤森英二）

＊第5回 夏休み 映画上映会

2025年8月9日（土）

会場：佐久穂町生涯学習館「花の郷・茂来館」メリアホール

内容：【映画上映】

『掘る女 縄文人の落とし物』 2020年公開
松本貴子監督作品

【アフタートーク】

堤 隆×藤森英二 「佐久穂町の遺跡を掘る！」

黒曜石研究センターの所在する明治大学と長野県を主な会場として開催されたが、各回とも50名を超える参加者があり、関心の高さが窺える。今後も適宜、開催予定である。（鈴木）



第4回 考古学フォーラム 石刃づくりの実演の様子

黒耀石研究センタートピックス

中村由克客員研究員 日本旧石器学会賞を受賞！

日本旧石器学会賞は旧石器研究の発展に貢献し、優れた業績を上げた学会員に送られます。2024年度学会賞は本センター客員研究員の中村由克さんが受賞しました。

中村さんの野尻湖遺跡群の研究成果と石器石材研究の分野での長年の研究業績が受賞の理由として挙げられました。特に石器石材研究については石斧の素材である透閃石岩の再認定とその交流圏に関する研究や黒耀石の晶子形態による産地判別の試みなど、黒耀石研究センターの客員教授、客員研究員として取り組んできた研究が評価されました。

2025年6月21日に東北大学で開催された日本旧石器学会総会では、中村さん（左）と会長（右）が授状を授与されました。

(鈴木)



日本旧石器学会賞授賞式 中村客員研究員（左）と会長（右）



完成した黒耀石研究センターのパンフレット（左）とクリアファイル（右）

黒耀石研究センターの パンフレット、クリアファイルができました！

黒耀石研究センターでは、年に2回のニュースレターの発行、ホームページでの情報発信など、これまでも活動の紹介や普及活動を行ってきているが、より広い層にアプローチできるよう、2023年からは「黒耀石カード」の配布（現在、No. 4まで作成）、さらに今年度に入り、Facebook上でも各研究員の活動まで含めた、様々な情報発信を始めている。

そして今回、新しいパンフレットと、オリジナルのクリアファイルを作成した。パンフレットはカラー4つ折で、センターの存在理由や、活動・研究内容、さらに黒耀石の知識などを詰め込んだ内容とした。クリアファイルは、明治大学が調査した北海道白滝部台遺跡の黒耀石製尖頭器や細石刃核をあしらったデザインで、どちらも黒耀石や考古学の魅力を伝えると同時に、黒耀石研究センターの存在や活動のアピールにも活かせるものとなっている。センター主催の考古学フォーラムやシンポジウムなどの会場で配布予定である。

多くの方に手に取って頂き、ご活用いただければ幸いです。

(藤森英二)



黒耀石研究センター公式
Facebook



黒耀石カードNo.1~4

明治大学オープンキャンパス ワークショップ “チャレンジ実験考古学！” 開催

2025年盛夏、8月6・7日の2日間、恒例の明治大学オープンキャンパスが開催され、明治大学を目指すたくさんの若者やその家族で賑わった。

世界にただひとつという明治大学の黒曜石研究センターの研究に触れてもらい、考古学の魅力を肌で感じ、明治大学で考古学を学ぶ学生を募るべく、「黒曜石研究センターワークショップ・チャレンジ実験考古学！」のブースがアカデミーコモンの博物館教室に設けられた。センター初の試みである。

当初、どれだけの若者が集まるか予測がつかなかったが、開催してみると二日間で373名もの参加者があり、教室から参加者が溢れるような時間帯もあって、大盛況を呈した。

ワークショップは次の1～3のように順序立てて実施した。最後にはミニプレゼントを参加者に進呈した。

- 1 「石器とは何か」という5分映像を鑑賞し、石器の基礎を知ってもらう。
- 2 黒曜石の剥片を選び作る石器（ナイフ形石器・搔器・削器）を決める。
- 3 ハンマーストーンや押圧剥離具（鹿角・銅線ペンシル）で石器製作。
- 4 黒曜石研究センターのパンフレット・オリジナルクリアファイル、黒曜石カードの配布。

黒曜石は、北海道白滝産の良質な素材が選ばれ、作った石器は本人にお持ち帰りいただいた。石器で紙を切り、その切れ味に驚いた参加者もいた。器用にモデルに似た石器を作るもの、黒曜石の割れ具合に手こずるものなどさまざまだったが、黒い天然ガラスでケガをする参加者もなく、無事ワークショップは終了した。

運営には、黒曜石研究センターのスタッフが当たったが、明治大学の考古学専攻生や大学院生計5名の力強い協働があつてとても円滑に進行した。参加者の中には、実際に考古学を志しているという高校生や、さらには具体的な授業の内容、その後の就職などを聞く志望者もあつて充分な手応えを感じることができ、ここから未来の考古学者が生まれそうな希望をもてた2日間であった。（堤 隆）



ワークショップで石器づくりにチャレンジする参加者の様子

新任補助研究員の挨拶

今年度5月より、黒曜石研究センターの補助研究員に就任しました藤森英二です。勤務地は、標高1400mの長和分室。思えば明治大学で考古学を専攻し、初めて本格的な発掘調査に参加したのが1992年の夏であり、その場所こそがここ、長和町鷹山地区の星糞峠黒曜石原産地遺跡でした。あれから30年以上経ち、こういうかたちで当地に通うとは、思いもせんでしたが。

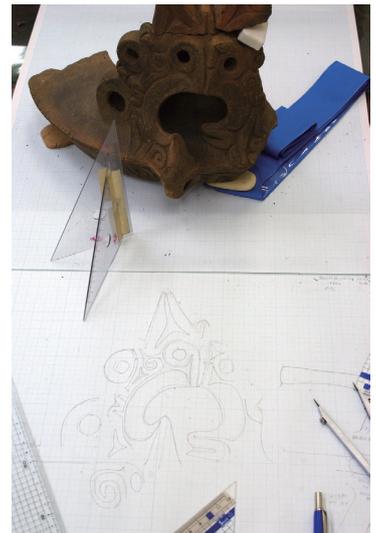
大学卒業後、黒曜石の研究になんとか繋がろうと、勤務地の北相木村では縄文早期の柘原岩陰遺跡で黒曜石製石器のレポートをいくつか書き、2011年には当センターの計らいにより、同遺跡の黒曜石石器の原産地推定を実施して頂きました。その結果を『環境史と人類』に報告させてもらったことは、個人的にも感慨深いものがありました。

その頃は、他にも長野県内において、著名な諏訪湖底曾根遺跡（諏訪市・縄文草創期）や自ら調査した大師遺跡（南相木村・縄文前期後半）などで黒曜石を見つめ、一方でチャートばかりで黒曜石の出ない木次原遺跡（北相木村・縄文前期前半）を取り上げるなどしてきましたが、鷹山の黒曜石原産地は、常に憧れの眼差しで見上げる場所でした。

今回機会を頂いたことで、またこれまでとは違った立場と見方で黒曜石研究に携わることが出来るのは、望外の喜びであると同時に、今の自分に何が出来るのかと、自問する日々でもあります。

また、個人的には縄文中期の蛇体装飾把手土器を追いかけたいのですが、そのテーマの一つは物や情報の移動、伝達であり、黒曜石研究と重なる部分もあります。そんなことも考えつつ、研究員の皆さんと共に、考古学の普及や研究に取り組んでいければと思います。

（藤森）



蛇体装飾把手土器の実測の様子

明治大学黒曜石研究センターニューズレター 第23号

発行日：2025年9月30日
編集・発行：明治大学黒曜石研究センター 猿楽町本部
〒101-8301 東京都千代田区神田猿楽町1-6-3
電話：03-3296-4424

黒曜石研究センター 長和分室
〒386-0601 長野県小県郡長和町大門3670-8
電話：0268-41-8815
URL:<http://www.meiji.ac.jp/cols/>

印刷：共立速記印刷株式会社
〒102-0072
東京都千代田区飯田橋3-11-24
電話：03-3234-5511



*当センターでは施設の固有名称として「黒曜石」の表記を使用しています。